

第1回 学校関係者評価委員会

1 実施日 平成30年8月28日(火) 午後4時～5時30分

2 会場 校長室

3 参加者 学校関係者評価委員 山口 幸久(教育振興会会長) 中畠 義夫(教育振興会副会長)
小野 茂之(教育振興会副会長) 志村 勇(教育関係有識者) ㊤
名取 和男(上八田育成会会長) 市川 孝嗣(主任児童委員)
清水 正博(保護者代表・PTA会長 学校関係者評価委員長)
野上 裕美(保護者代表・PTA副会長)
学校側 笹本 仁(校長) 本田 司(教頭)
田原 和仁(教務主任) 横澤 敏英(生徒指導主任)

4 学校側から提案された内容

(1) 教職員自己評価(教務主任) (2) 児童アンケート(生徒指導主任) (3) 保護者アンケート(教頭)についての解説や考察、具体的な学校の様子を説明した。

5 協議された主な内容

学校側からの説明を受け、学校関係者評価委員長が座長を務め、座談会を行った。

※○……委員からの意見・感想 ☆……学校の考え

(1) 学習について

○朝の学習については、4割程度の先生があまり効果的に実施できてないと回答しているとともに、教科等の指導において、Aの「そう思う」という回答が少ないように感じられる。教師の授業力向上を進めてほしいと思うが、児童アンケートとの関連を含めて学校としてはどう考えているか。

☆朝の学習では、朝の会が延びてしまい時間的に十分な取組ができていないということの反省であると捉えている。外国語教育を今年度より先行実施した関係で、3年生以上は火・木の朝の学習は、正式な授業(モジュール学習)として行っており、授業時数に関わるのでそれはしっかり実施している。朝の児童の様子としては、登校して学習の準備が整うと、朝の会が始まる前から読書を行っており、心を落ち着けて学習に臨む気持ちをつくるようにしている。教科等の指導において、Aの「そう思う」の回答が少ないのは、教師が自省的に厳しく回答しているからであると考えられる。学習面については、教職員・児童・保護者のアンケートにおいて共通した課題であり、校内研究会等を通して研修し、指導力の向上に努めている。

(2) 生活について

○児童アンケートの10や11項目では、肯定的な回答が多くなってしかるべきあり、否定的な回答が多いと、いじめにつながってしまう。発達段階から学年ごとの違いはあると思うが、高学年になればなるほど、肯定的な回答が多くなってほしい。学年ごとなどで結果を把握し検討しているか。
☆学級ごとのデータを示しており、担任も承知している。担任は、アンケートだけでなく、日頃か

らアンテナを高くする中で、未然防止と素早い対応を心掛けている。

○本校では、いじめや不登校があるのか。答えられる範囲で教えてもらいたい。本校児童は、基本的に中学校までは一緒であり、一度できてしまった人間関係を変えることは難しい。いじめなどの状況は、命に関わるような事案に発展することもあると考えられるので心配である。

☆いじめについては、認知しているもので、2件あり対応した。いじめを認知した場合は、逸早く対応していく。また、高学年では、児童によっては、見守りが必要な場合もある。6月28日には、4・5・6年生において、ソーシャルスキルトレーニング教室を開催し、いじめがないようよりよい人間関係づくりができるような学習を行った。

○しつけは学校だけではできないので、家庭が力を入れて行うことが大事である。例えば、「椅子から立ち上がった後に、その椅子をしまわない。」といった課題があったとすると、そういうことを家庭に情報として知らせているか。家庭にお願いの文書を出して、積極的に家庭から指導してもらうという方法もある。

☆保護者アンケートからも、家庭において基本的生活習慣への指導は熱心に行われている結果がでている。したがって、学校からのたより等で知らせて協力を得ながら行っていきたい。学校では、小笠原流礼法の師範を招き、心を形で表す学習をしており、礼儀や作法を身に付ける授業を行っている。

(3) 安全・安心について

○教職員自己評価において、下校時のことが挙げられているが、どのように行っているのか。

☆1年生は、コースごとに分かれて下校している。本校は複数下校が基本であり、一人では帰らないようにしていることから、2年生以上でも、1年生のようにドーム下に集まって、同じ方向の児童と一緒に下校している。しかし、教室で複数下校の確認ができていないならば、ドーム下に集まらなくても良いのではないかという意見が出ている。

○複数下校を基本としてそれが守られるならば、児童の成長に応じて、ドーム下に集まらないで教室で挨拶をしたら、そのまま下校にしても良いのではないかと思う。

(4) その他について

○学校応援団（人材バンク）や子どもを守る会の活動はどのようになっているか。

☆学校応援団については、白根御勅使地区で現在40名ほどの登録（人材バンク）がある。活動の内容としては、地域の文化財や農業等について説明をして頂いたり、家庭科でミシンの学習についての補助といったことをお願いしたりしている。しかし、現状は登録されている方と学校とで都合がつかないことがあり思うように活動できておらず、教職員が知り合いなどを通して、登録されていない方に頼むこともあった。そのようなこともあり、今年度は実質的な登録者数を増やす取組をしている。40名ほどの内10名以上は今年度新規に登録していただいた方である。子どもを守る会は、現在260名ほどの登録がある。タスキを着けていただいて子どもの安全を見守る活動をしてくださっている。自治会にチラシを配付したり、教育振興会の総会等でも紹介したりして、登録者を増やす取組をしている。

○地区としても、学校側から欲しい人材を言ってもらえると協力できると思う。

○保護者アンケートについては、昨年度とは構成員が違うので直接比較はできないので、低いことはあまり考えなくてよい。学校全体ではなく、学年別に見ていき、特に高学年がどういう回答しているのか大事にもらいたい。これからも、教職員には頑張ってもらいたい。

○前年度比でマイナスと言っても、ごくわずかな割合であるので問題ではない。子どもが、「学校に

行くことを楽しみにしている。」「学校のことを話す。」という内容の肯定的回答が多いということ
は、非行に走らないことにつながる。これは、学校教育が素晴らしいということであるので、教職
員は自信をもってやっていてもらいたい。

6 全体評価

全体傾向を把握するため、[A：そう思う][B：ほぼそう思う]という評価を肯定的評価とし、それら
の合計が80%を超えている場合は『満足できる状況』、[C：あまりそう思わない][D：そう思わない]
という評価を否定的評価とし、それらの合計が20%を超えている場合は『改善の余地がある』と判断
している。

(1) 教職員自己評価について

36問中34問において、肯定的評価80%を超えている状況から、満足できる状況にあると考
えられる。改善の余地があると判断される内容は、「朝の学習（15分間）は、基礎学力の定着をめ
ざしながら、効果的に実施している。」と「地域の人材や文化財・自然環境などを、積極的に教育活
動に取り入れるよう努力している。」である。これらについては、協議の中でも話題になったが、原
因を探り改善にむけて取り組むようにしていく。

(2) 児童アンケート評価について

11問中10問において、肯定的評価80%を超えている。改善の余地があると判断される内容
は、「自分で考えたことを、進んで発表している。」である。「勉強がわかる」「しっかり聞く」こと
ができていますので、校内研究とも合わせ、主体的に学習活動へ取り組み、発表などを通して、友だ
ちと関わり合いながら学び、高めあう子どもを育てていきたい。

(3) 保護者アンケート評価について

20問中19問において、肯定的評価80%を超えている。満足できる状況と捉えることができ
る。改善の余地があると判断される内容は、「子どもは、学習がわかり、基礎学力が身についている。」
である。教職員自己評価や児童アンケートと関連した内容であり、この項目の肯定的評価の向上に
向けて継続して努めていく。

(4) まとめ

各評価について、高い水準で肯定的に回答されていることは、本校の教育活動が安定して行われ
ていると考えることができる。改善の余地があるとされる項目については、学習に関わる内容であ
ることから努力すべき課題が明確になった。

7 今後の課題として意識されたこと

- (1) 具体的な課題としては、学力の向上といじめへの対応の2点である。これらのことが改善される
ように研修等を行い教職員の指導力を向上させるとともに、保護者と連携を図って対応していく。
- (2) 保護者は、学校への期待がある。学校は、その期待に応え、保護者の信頼を得る教育活動を行い、
家庭の教育力を生かしながら学校教育目標の実現に向けて努めていく。

8 特記事項

特になし

記載責任者

学校関係者評価委員会委員長（PTA会長） 清水 正博